

Report

いのちを守る教育を支える教員の Teachers' Capacity Development for Enhancing Disaster Risk Reduction at School 防災キャパシティ・ディベロップメント

311いのちを守る教育研修機構
宮城教育大学防災教育研究機構
発足記念国際シンポジウム/セミナー報告

To commemorate the launch of 311 Disaster Risk Reduction Learning Institute
for Educators (DRR-LIFE), Miyagi University of Education



世界防災フォーラム | 令和元年11月9日^①~12日^②
仙台国際センター
防災ダボス会議@仙台2019/仙台 防災・未来フォーラム2019

“World BOSAI Forum (WBF)/Disaster Prevention Davos Conference 2019 in Sendai”
at the Sendai International Center from November 9 to 12, 2019



国立大学法人
宮城教育大学
311いのちを守る教育研修機構

Contents

「教員の防災力向上」をテーマに 機構発足シンポ開催-世界防災フォーラム	P2
「次世代は語る」震災伝承テーマに 「前日祭」セッション企画	P7
市民とともに考える 「災害メモリアルに学び、描く未来」	P10
-World BOSAI Forum- Teacher's Capacity Development for Enhancing Disaster Risk Reduction at School	P13
Oral session at the Pre-WBS Festival planned by the University under the theme of “Handing down disaster experiences to the next generations”	P18
“Learning from disaster memorial facilities to design the future” together with local residents	P21

「教員の防災力向上」をテーマに 機構発足シンポ開催-世界防災フォーラム



令和元年11月9日(土)～12日(火)に仙台国際センターで開催された「世界防災フォーラム/防災ダボス会議@仙台2019」(実行委主催)において、宮城教育大学は同10日、「いのちを守る教育を支える教員の防災キャパシティ・ディベロップメント」と題する国際シンポジウムを企画、実施し、「教員の防災力向上」をテーマに議論を深めた。

本年4月に本学が設置した学校防災の人材育成拠点「防災教育研修機構<311いのちを守る教育研修機構>」の発足記念と位置づけ、東北大学災害科学国際研究所と国立大学協会が共催した。国内外の防災、教育関係者、防災実務者等あわせて135名が出席。村松隆学長がシンポジウムの趣旨について説明して開会を宣言し、仙台市の郡和子市長から寄せられた機構発足とセッション実施に対する祝辞が披露された。



村松 隆
宮城教育大学長





セッションチェア（座長）
小田 隆史
防災教育研修機構 副機構長／准教授

シンポジウムでは、特別講演として、トルコ共和国より招聘したトゥバ・ギョクメノール・カラカヤ 国民教育省大臣補佐官（防災教育研修担当）と文部科学省の森本晋也 安全教育調査官が登壇した。トゥバ氏は、日本と同様に地震大国であるトルコにおける防災教育の重要性を強調し、JICA（国際協力機構）の支援も得て構築中のeラーニングも採り入れた教員向け防災研修の詳細や普及の課題を報告。森本氏は、東日本大震災での防災教育の成果について中学教員として自ら関わった岩手県釜石市での事例を紹介し、教職員が学校安全に関わる資質・能力を身に付けるために実施している文科省の研修方針などを説明した。



トルコ共和国 国民教育省大臣補佐官
トゥバ・ギョクメノール・カラカヤ氏



文部科学省 安全教育調査官
森本 晋也氏



二氏の講演を受けて、佐藤健本学客員教授（共催先の東北大学災害科学国際研究所教授）をモデレーターに、わが国の教員に対する防災リテラシー向上の研修をどう体系化していくか、といった課題をめぐり、会場参加者も交えて意見交換した。



討論モデレーター
佐藤 健
宮城教育大学客員教授／
東北大学災害科学国際研究所教授

後援機関を代表して出席した渡邊正樹日本安全教育学会理事長（東京学芸大学教授）は、トルコにおいて、研修内容の全国的な普及に力を入れている点を評価した上で、「教員個々人の知識・技能、スキルを高めていくのも大事だが、指導者として活躍する教員の力をつけていくことが重要」と指摘し、新設された本学の機構が全国をリードし、防災教育の指導者育成に貢献して欲しい、と期待を述べた。



渡邊 正樹 日本安全教育学会理事長からの討論コメント

震災当時、勤務していた沿岸部の小学校で津波を経験した現職教員の参加者は「災害が起きる前に子どもたちに対してもっとできたことがあったのではないかという、後悔の思いを持ちつつ日々、これからの自分に何ができるかを問い、震災後の防災教育に取り組んでいる。自然の恵みと脅威の両面に目を向けて防災を教えられるのは学校教育。宮教大が防災でどのように学校現場とつながりを築いていくか注目していきたい」と語った。



現職教員からの感想

意見交換の最後に森本氏は、教員の防災力向上には「理論の知と学校の実践知を融合させることが重要。新機構がその理論的バックボーンを支え、知見を宮城県内だけでなく全国に、そして世界に出していく拠点となるよう期待する」と激励した。

締めくくりとして機構の武田真一特任教授／統括プロデューサーが、新機構の取り組み概要と初めて実施した学生向けと教員向け被災地視察実地研修や自主ゼミナールの活動を概説し、「本日のシンポジウムの成果を次のステップに生かし、被災地から防災教育の教員養成プログラムを発信し続けられるよう努力する」と決意を述べた。

岡正明理事・副学長（防災教育研修機構長）は、セッション全体を振り返り、宮城教育大学が東日本大震災被災地唯一の教員養成大学として、防災教育研修の高度化、広域化に大きな使命を果たしていく姿勢を確認し、閉会した。



武田 真一
防災教育研修機構特任教授／統括プロデューサー



岡 正明
理事・副学長／防災教育研修機構長

世界約40カ国から900人近くが参加した世界防災フォーラム2019全体の閉幕式において発出された「議長サマリー」の「記憶と世代交代」(Memories and generational change)の項において、宮教大企画のテーマを踏まえ次のような記載がみられた。すなわち「学校教育と教員のリーダーシップが、これら(災害記憶の風化に抗うべく伝承する若者らの営み)を促進し、防災の知識と実践とを結びつけることに資する。それにより、特定の場所や時間で生じた災害の直接的経験を遙かに超える広がりをもったものとなる。付け加えるとすれば、教員ら自身が望むらくは、防災に関する実地の研修に臨むべきである(仮訳)」。

フォーラムの前日祭でも本学企画セッションがあり、同時開催された仙台防災未来フォーラムでもセミナーやブース展示を実施した。一連のイベントを通じて、災害伝承における学校教育の役割、それを担う教員に対する防災研修の必要性を国内外の参加者と確認し合い、被災地の国立教育大学が社会に防災文化を根付かせるために果たすミッションを広く共有できた意義は大きい。

● 概要

いのちを守る教育を支える教員の防災キャパシティ・ディベロップメント

日時/2019年11月10日(日) 18:00~19:30

場所/仙台国際センター 会議棟2階 萩

主催/国立大学法人宮城教育大学

共催/国立大学法人東北大学災害科学国際研究所、一般社団法人国立大学協会

後援/国土交通省東北地方整備局、独立行政法人国際協力機構(JICA)東北センター、
宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、岩手県教育委員会、福島県教育委員会、日本安全教育学会

本シンポジウムは、世界防災フォーラムの一般公開セッションにおいて、一般社団法人国立大学協会「2019年度防災・日本再生シンポジウム助成」(「広域連携型国立教育大学による被災地と未災地との協働防災人材育成-国内外の現状を踏まえて」)の支援を得て、同協会及び国立大学法人東北大学災害科学国際研究所と共催したものです。

宮城教育大学は「ユネスコスクール」の認定を受けており、また国連大学主宰のアジア太平洋地域ESD実践大学・研究機関ネットワークProSPER.NETの加盟機関として、持続可能な社会づくりに向けた教育の推進を継続しています。



「次世代は語る」震災伝承テーマに 「前日祭」セッション企画



被災体験と思いを描いた紙芝居の実演をするFプロのメンバーら

「世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台2019」（令和元年11月9日～12日、仙台国際センター）において、宮城教育大学防災教育研修機構は国際シンポジウムの開催とともに、開幕日9日のキックオフイベント「前日祭」の企画、運営に中核として参画し、機構が担う役割の一つである「次世代の震災伝承」をテーマにセッションを開催した。

前日祭は、東日本大震災の被災地でフォーラムを開く意義を確かめ、被災地の復興の歩みを参加者と共有する場として、フォーラム実行委が主催した。実行委の主体である東北大学災害科学国際研究所とともに宮教大などが共催して運営に当たり、全体の企画は災害研にも研究員として所属する防災教育研修機構の武田真一統括プロデューサーが担当した。

テーマは「311を未来へつなぐ」。震災で仲間を失うなど大きな影響を受けながらも再生に立ち上がり、復興の地域づくりに励んでいる宮城県名取市の閑上太鼓保存会、福島県相馬市の相馬盆踊り関係団体などが舞台を披露し、被災地の意気込みを発信した。相馬盆踊りの舞台では、フォーラムに参加した海外の研究者らも輪の中に入り、会場一体となって鎮魂の踊りを捧げ、復興を誓い合った。

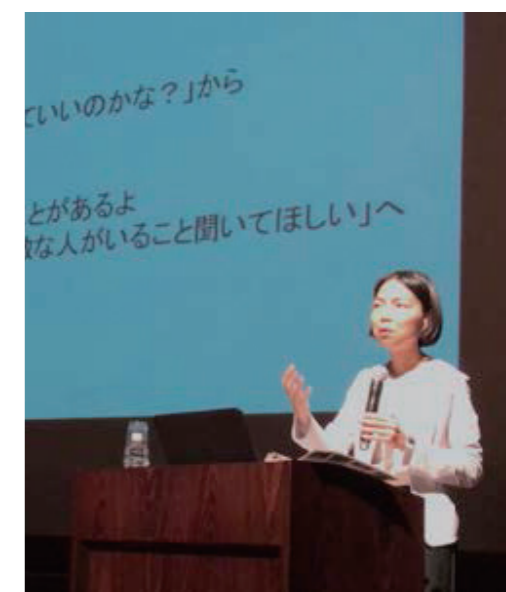


宮教大企画のセッションは「次世代は語る／震災を伝え継ぐために」と題し、武田統括プロデューサーの進行で、宮城県七ヶ浜町立向洋中学校卒業生のグループ「きずなFプロジェクト」の高校生6人と神戸学院大学現代社会学部の岸本くるみ実習助手が、それぞれ東日本大震災と阪神淡路大震災の伝承活動を報告した。



Fプロの高校生は、東日本大震災で家族を失ったメンバーの体験と思いを紙芝居にして地域の子どもたちに伝える活動を続けており、この日も紙芝居を実演しながら、震災を風化さないように未体験の子どもたちに備えと教訓を呼び掛ける活動の意義を説明した。

岸本さんは小学2年のときに阪神淡路大震災で被災し、全国初の防災専門課程ができた兵庫県立舞子高校の環境防災科の一期生となって防災教育に関わり続けている歩みを振り返り、「時間がたって気づくこと、伝えられることもある」と伝承を継続する大切さを強調した。



意見交換では「体験していない人は、体験者から聞き取るという形で伝承の担い手になれる」「防災、防災と構えるのではなく、知りたいという声に応え、分かりやすく伝えることが備えにつながる」と互いの活動のポイントを評価し合い、犠牲と混乱を繰り返さないために若い世代による伝承の輪をさらに広げていく必要性を確かめ合った。

前日祭全体の閉会挨拶では、防災教育研修機構長の岡正明理事・副学長が「震災伝承を通じた教員に対する防災教育研修の充実に向け、今後も関係機関と連携し、いのちを守る防災文化を根付かせる取り組みを展開して参りたい」と決意を披露した。



前日祭の閉会挨拶をする岡正明 宮城教育大学 理事・副学長

市民とともに考える 「災害メモリアルに学び、描く未来」

教職大学院生による発表／ブース出展 - 仙台防災未来フォーラム

令和元年11月10日(日)、仙台国際センター展示棟にて開催された「仙台防災未来フォーラム」において、宮城教育大学は「災害メモリアル施設から震災を学び、描く未来-未災者にできること-」と題するセミナーを開催するとともに、ブース出展を行った。

隣接する会議棟では、11月9日(土)～12日(火)に「世界防災フォーラム/防災ダボス会議@仙台2019」が同時開催され、本学は9日(土)の前日祭におけるセッション、10日(日)には国際シンポジウムを企画・実施した。世界フォーラムで本学は、<次世代の役割>、<学術的貢献>の側面から学校教育における伝承と防災の未来を考える機会とした一方、「仙台防災未来フォーラム」では、<市民>を含む多様なステークホルダーとの協働の視点から災害伝承と防災を考える場とした。

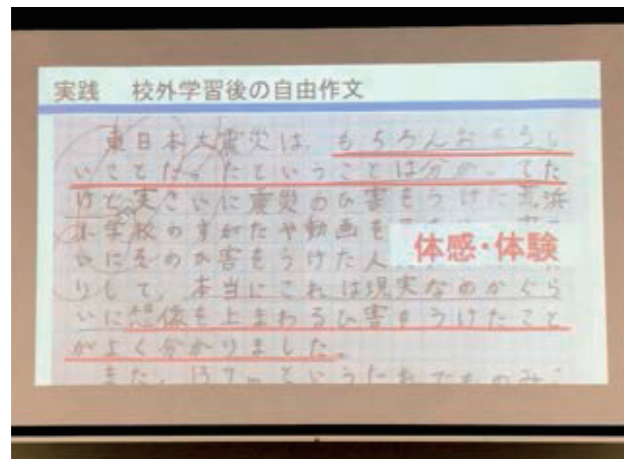
宮城教育大学は教職大学院の院生が中心となって、震災遺構 仙台市立荒浜小学校(以下荒浜小)の教育利用促進を目的とした「教員のための震災遺構を通じた「いのち」と「暮らし」の学びの手引き」と、「荒浜小見学に使える!児童生徒用ワークシートのアイデア」を制作し、平成31年3月10日(日)に開催された「仙台防災未来フォーラム2019」にて発表した。新年度になってこの手引きは、仙台市内全小中学校に配付され、現場の意見をもとにワークシートを追加したほか、東北を訪れる海外の教育関係者向け研修に活用するため、関係機関の協力を得て英語版・タイ語版・トルコ語版に翻訳された。

また、今回のフォーラムにあわせ、防災教育研修機構の公式HPに設置した「震災遺構活用支援プロジェクト」特設サイトをリニューアルし、常設サイト「伝承を通じた防災教育実践ポータル 災害メモリアルに学び、描く未来」の公開を開始した。

伝承を通じた防災教育実践ポータル 災害メモリアルに学び、描く未来



伝承を通じた防災教育実践ポータル「災害メモリアルに学び、描く未来」
<http://drr.miyakyo-u.ac.jp/memories/>



実践発表をする
宮城教育大附属小の三浦教諭

実践発表では、本学附属小学校の児童による荒浜小遺構訪問を企画した三浦秋司教諭が報告した。大学と附属小が協働し、重点支援研究プロジェクト『震災の記憶が希薄な児童に対する災害遺構を活用した防災教育の効果』の一環として、本年8月に附属小教諭の荒浜小下見研修を行った上、10月と11月に5年生、6年生の児童が荒浜小で課外学習を行った。

三浦教諭は、校外学習後の児童の自由作文を披露しながら、震災遺構での学習では、「焦点の明確化」に得られる効果が大いことを指摘し、「本物を体感・体験することの価値」が深められ、「浮かび上がる自然と人々の関係」についても実感することができたと、課外学習の成果を自己評価した。



プロジェクトメンバーで宮教大教職大学院生の高見秀太郎氏と大林要介氏は、災害遺構を通じて学びは、被災した事実にとどまらず、遺構周辺の地域にかつて住んでいた人々や、その場所に寄せられた様々な思いに触れて、いのちの大切さや日常のかけがえなさに気づかせることができることを強調した。その上で、ポータルサイトの意義について、各地の災害遺構と伝承のあり方を考える上で参考になる、教育実践を蓄積させ、教育の意義や効果を高める一助になると期待を語った。



発表の感想を語る阿部淳一 仙台市立高森小学校長

震災当時荒浜小5年1組の担任で、手引き書の作成に協力した阿部淳一氏（現・仙台市立高森小学校長）は、「自分もよく震災体験を語るよう依頼されるが、ただ漠然と話しても児童の実感につながらない。三浦先生の実践は、学校における震災伝承のあり方を考える上で大変参考になった」と感想を述べた。

宮教大ブースでは、過去の被災地支援活動や、学生・教員向け研修の様子などを紹介した。教育関係者のみならず、多くの市民が足を止め、防災・伝承の取り組みに対する関心の高さを伺えた。ある参加者は、自身の震災体験を語り「どうか地域の子どもたちに震災体験を伝えたいが、何をすれば良いかわからない」と語った。

ブース担当者は、参加者とのやり取りを通して「それぞれの立場から災害に向き合い、他者を想う営み、あたたかくつながり、優しい社会を思い描くことが、伝承を通じた防災教育の本質」と再認識したという。

宮城教育大は、本年8月に仙台市・仙台市教育委員会と防災教育・啓発の推進に関する連携協定を締結し、震災遺構の学校教育や教員研修での有効な活用のあり方の研究を深化させているほか、宮城県・仙台市の「インバウンド向け防災観光推進事業」にも参画しており、災害メモリアルに学び、未来を描く様々な取り組みを積極的に支援していく。

